

1. 普通鋼鋼材の在庫状況見通し (全国市中数量調査の自社所有分による)

\*上段は前期比在庫増減、中段〔 〕は在庫水準、下段( )は在庫水準前期比(%) (自社所有分に限る。  
点線内は全鉄連による予想数字 ( )内は誤差率=予想値÷実績

平成22年12月末	平成23年3月末	平成23年6月末見通し	平成23年9月末見通し
-66千トン 〔 2190 〃 〕 ( 97. 1%)	-80千トン 〔 2270 〃 〕 (103. 7%)	+100千トン 〔 2370 〃 〕 ( 104. 4%)	+24千トン 〔 2394 〃 〕 ( 101. 0%)
2195千トンの(100.2)	2150千トンの(94.7)	*	*

2. 前述の在庫増減がそれぞれ市況に及ぼした影響

平成22年12月末	平成23年3月末	平成23年6月末見通し	平成23年9月末見通し
鉄筋、H形鋼、C形鋼の平均市況は77,000円で前年比+7,400円、前期比では-800円。条鋼品種は強含み展開となった。11月販売が思いのほか、増加したこともあるが、スクラップ上昇によりメーカー値上げ必至の状況となった。また、市中在庫は枯渇状態に近い水準まで減少し、様変わり局面となった。また、建設需要の低落が底を打ったとの見方が広がっている。鋼板類の在庫増が懸念されていた。	鉄筋、H形鋼、C形鋼の平均市況は83,800円で前年比+10,700円、前期比では+6,800円。東日本大震災による夥しい被害は、社会的混乱を引き起し収束への方向がみえない状態だった。震災発生後の1~2週間は店売り玉が動き、早急に必要な資材の手当てが行われた。その動きが一段落すると、通常のペースに戻ったが、震災の影響で物件の延期、中止も出ており需要不足の状況を助長した。	5月連休明けから荷動きが落ち込み、6月もその基調で推移。3月後半から4月に掛けての仮需的な動きに対する反動と震災で被災し、産業活動が復旧していないことにより市場が閑散状態になったと思われる。その状況にも改善される動きが出始め、業種別に差異はあるが生産活動が震災前の水準に戻りつつあった。夏場に想定される電力不足が不安材料となり、回復の足枷になりそうだった。	電力不足による暑い夏。経験則にない事態に対処しなければならぬ。そのため見通しが立たないのだが、あえて言えば、需要面では期待できない。製造業中心に回復基調となるだろうが、電力使用15%削減という制約のなかで高い水準の生産は望めない。また、震災復興需要が本格化するのはいかなり先になるため関連資材の動きは活発化しないだろう。震災により縮小された市場環境に改善の動きはあるものの停滞感を払拭できない状況であろう。

3. 在庫積み増し、あるいは削減の意欲または方針

現状は在庫を減らせるだけ減らし、次の場面に備えるという姿勢であろう。市況動向は一部電炉の値下げ発表を契機に下落している。一方、高炉品は値上げされており、仕入れ高の販売安という採算を阻害される事態となっている。このような状況がいつまでも続くとは思えないが、今のところ赤字回避のため在庫減らし注力せざるを得ない。

4. 大阪、愛知の動向

(大阪) 3月後半にはほとんどの品種で仮需的な動きがあり、活発な荷動きが見られたものの、今期に入り3月の反動や震災による製造業の不振から低調に推移し、足許目立った動きは見られない。来期は今期(4~6月)がボトムとなれば、若干の需要は出てくるかもしれないが、やはり需要回復は来々期10月以降になりそうだ。

(愛知) 全般的に当地区は自動車、建設機械メーカーの回復が予想より早く、7~9月は8~9割操業まで戻ると期待。10月以降は本格的に回復してくると考える。一方、建設関連は製造業者の設備投資のズレ、新規住宅案件のズレ、国家予算のズレにより秋口から期待していたが半年程度遅れるのではないかと予想している。